

202108 口語詩句 8 月総評 龍 秀美

今月はまちりこ氏が絶好調で佳品がたくさんあり、どうしても外せないものだけという基準で選んでみてもこれだけの数になってしまいました。しかもそれぞれに違う多様な世界を見せてくれています。いきおい他の作者を、まちりこ氏と違うものを持っている人という判断で選ぶことになりました。

私がうんと小さかった頃

川の匂いは

もっと

人懐っこい気がしていた

作者 まちりこ 埼玉県

——「人懐っこい」という表現は「川」にとってこれ以上ないフレーズと感ずます。かつて川は、生活とも心情とも離れがたい現実としてありましたが、現実がだんだん必要でなくなっていくのではないのでしょうか。

星条旗の星たちを

ぱきぱき

切断したいのに

左利き用の鋏しかない

作者 岩槻 怜 広島県

——鋏は不思議で利き手と違くと全然切れません。役に立たないモノを持たされている私たちと日本。

海水浴

季語須可捨焉乎とか

言えない

僕ら

作者 大橋 弘典 群馬県

——短詩形文学で季語や音律という大きな力を手放すと残るのはどんな方法なのでしょう
か。

二丁目の交差点でもすること無し

作者 まちりこ 埼玉県

——二丁目で無ければ三丁目でも四丁目でもすることは無いだろう。そもそも私たちに「す
ること」があるのでしょうか。

プールの授業のあと

濡れたまま編んだ髪は

淡々と

セーラーの襟を湿らせた

作者 春町 美月 大阪府

——女子学生のセーラーの襟。それが「淡々と」湿っていく様子は充分官能的です。

初めて

戦闘シーンのある

映画を観た

みんな

すごく頑張っていた

作者 まちりこ 埼玉県

——「戦闘」というものと今の私たちの現実とは遠い。「頑張って」いるのは俳優か映画を作った人たちか或いは見ている観客か。「みんな/すごく頑張って」いるとしか言えない。本物の戦闘では使えない言葉。

三日月が指先に十

空に一

作者 猫谷圭希 広島県

——つま先の白い三日月。ひふみよいむなやここのとお、そして空に十一番目。

「この決済方法はね

すごく音が綺麗なの」

店主のひと言で幸せになった一日

作者 風船 東京都

——音で決済をする。それが何か？どうせならきれいな音で。

ちゃんと戸締まりをしたか

気になっているような

優しさで

私は抱かれている

作者 まちりこ 埼玉県

——何か忘れ物をしたような愛。決して不満足ではないのだけれど・・・もうそれも忘れた。

耐えきれず湖で泣く

母さんが祖母を母さんと

叫んでいる

作者 まちりこ 埼玉県

——子供に帰った母さん。あんなに強く優しくかった母さんが幼子のように叫ぶ。泣く場所は静かな羊水を湛えた湖か。それは帰っていく場所。

コンビニの二十四時間営業の

ちいさい鯖びを食べている鶴

作者 うずたろう 埼玉県

——最近、古い日本語と現代を合わせて作るシーンが増えたような気がします。二十四時間稼働しているというコンビニはそれだけで鶴が潜むような不思議空間ですが。

晴天

舌を出すように

ベランダに並ぶ布団

作者 燦嗣いとり 愛知県

——プライバシーを象徴する布団。見慣れた風景が「舌を出す」という表現で一気に生活のリアルを感じさせてくれます。

打ち上がる前に花火を折り曲げる

作者 細村 星一郎 東京都

——「打ち上げる」ではなく「打ち上がる」というのは既に点火されているのでしょうか。それを曲げるという危険極まりない行為。知らず知らずわたしたちもしているのでは。

w が草なの x が花野なの

作者 大橋 弘典 群馬県

——ネット社会で言葉以前の文字自体が新しい顔を持ち始め、自己主張を始めました。では y は何？ z は？